

---

## Why communication isn't a joke: Relevance and content

### Diane Blakemore の講演

武内道子

イギリス Salford 大学の Diane Blakemore 教授が British Council の招きで来日したのを機に、人文学会の援助を得て、表記のタイトルで、10月13日、14:40~16:10に講演会を持った。

言葉を使って何をするかといえば、コミュニケーションということになる。言葉の使用を扱う語用論の研究はこの10年余関心と洞察が進んできたが、Blakemore 教授は語用理論として目下もっとも注目を集めている関連性理論の旗頭の一人である。

大きな女の人がプラカードを持って立っている。そのプラカードには Free women now とある。傍らで、彼女を見上げて小さい男が Can I have

one? と発している。Blakemore 教授が示した一コマの漫画である。

プラカードの文が発話として実際の使用に供されたとき、相手に伝えようとする意図を持った話し手であれば、つまりノーマルなコミュニケーションでは、聞き手は解釈に当たって「他の」解釈は復元しないものである。自分の持つ百科辞典的知識（文脈情報）を登用し、推論を駆使し、話し手の発話意図の正確な復元を目指して、聞き手の行う発話解釈が何故そのように行われるのか、あるいは時として失敗するのか。これは人間の頭の中における認知との関係において適切にとらえられるという観点を関連性理論はとる。語用論的解

---

積は心理的な事象であり、単一の認知的原理「関連性の原理」に支配されるものであるというこの理論の理論的基盤と概念を、上記の漫画を始めとする考えられた例を使っての話であった。

話し手の発話意図の復元の過程は必ずしも生やさしいものではないだけに、rewarding なものもある。すなわち認知上の効果が得られるのであるが、時として、関連性を求めての文脈情報の使用のやり方を逆手に取れば、漫画の小男の発話のように joke を生み出すことになる。

マイクを使わず、漫画を用意し、黒板を使い、大変精力的に、熱を込めて話された。学生、院生、非常勤を含めた先生方、他大学からの参加もあって、100名に近い聴衆を得たが、反応がほとんどなく、質疑も少なかったのは残念だった。

Blakemore 教授は神奈川大学の他、慶応大学、国際基督教大学、そして関西では京都大学、神戸女学院大学、大阪大学で講演を行った。

(なお本講演内容は『神奈川大学言語研究』No.21に掲載の予定である。)